MEDICAMENT NEWS
第2182号　2015年1月5日　月曜日

発行所
株式会社 ライフ・サイエンス
発行人／石澤　弘平
〒150-0001
東京都渋谷区神宮前5-53-67コスモス青山
Medicament News 編集部
(電話)03-3407-8952(直通)
03-3407-8963(代表)
ISSN 1347-3204
購読料／1カ年　10,800円＋税
(毎月3回5・15・25日発行)

ニュースレーダー

はがき大に薬剤の重要情報を凝縮
「アラートカード」を作成・活用

—山口大附属病院・古川氏—

山口大学医学部附属病院薬剤部の古川裕之部長—写真—は先月9日，東京都内で開催された記者セミナー（中外製薬㈱主催）に登壇し，「常に更新される医薬品安全性情報の確認」，「新たな副作用シグナルの収集」，「法律・社会状況の変化に関する患者への説明・指導義務」など，薬剤師（病院薬剤部）に求められる役割と，同院で実際に実施してきた様々な創意工夫について，講演を行った。

◎危険情報まとめた「アラートカード」

医薬品の安全性に関する情報は日々更新され，安全性速報（ブルーレター）など様々な情報が発信されている。しかしその数はあまりに多く，古川氏は「本当に重要な情報が現場に伝わりにくいのではないか」と危惧する。

とはいえ，プロである以上「知らなかった」では通じない。そこで古川氏は，状況解決の手段として「アラートカード」を提案した。添付文書のうち「警告」で示されている健康被害に直結する注意事項と具体的情報を，はがきサイズの紙1枚にまとめたものだ。

このアラートカードは，まずは中外製薬の抗がん剤「リツキサン」に採用され，その出来栄えを見た他社でも採用された。古川氏は「成功例がひとつあるとワッと広がりやすい」という。

◎患者観察と記録で副作用を早期発見

さらに古川氏は，薬剤師に求められる仕事として「副作用シグナルへの気づき」を挙げた。

従来，副作用の確認といえば，添付文書に記載されている事象にのみ注意を払っていた。いわば，既知の情報にばかり注目していたといえる。

これに対して古川氏は，いま患者に起きている小さな変化に気づくことも大切なのだと指摘。「何もないのも重要。何もないなら何もなかったと記録するよう指導している（山口氏）」。

副作用の早期発見は，被害拡大を防ぐだけでなく，「新しい薬のタネ」が生まれるきっかけになることもある。古川氏は「全ては適切な患者観察から始まる」と述べ，時間があったら患者を見にいくよう指導しているという。

◎運転など患者指導用の資材も作成

医薬品の中には，服用中の自動車の運転や高所での作業が禁止されている製品もある。こうした情報を患者に適切に伝えるのも，薬剤師の仕事だ。

製薬企業も，薬剤ごとに説明資材を制作している。しかし古川氏は「サイズもバラバラで，内容もあまり実用的とはいえない」と苦言を呈する。

そこで，山口大学医学部附属病院では，特に添付文書で「警告」の記載がある薬については，専門用紙を制作して，患者に説明することにした。これもまた，はがきサイズ1枚の紙で，注意事項がまとめてある。イラスト入りでわかりやすく，使いやすい。

時代と共に，薬剤師に求められる仕事の内容も変わってくる。山口氏は今後も「重大な副作用の早期検出」，「患者への説明・指導義務」などの課題に取り組んでいきたいと展望を述べた。